

# 藤沢と江戸の出版事情 葛屋重三郎と絵師たち

2024年12月24日(火)～2025年2月24日(月/休)

## 浮世絵館だより

藤沢市  
藤澤浮世絵館

2025年  
2月  
WEB版

### 江戸時代の製本の特徴 なぜ袋とじなのか？

江戸時代は庶民も読書を楽しむ時代でした。特に黄表紙や合巻と呼ばれるような挿絵がたくさん描かれている物語や道中記などは人気がありました。これらの書物は総称して版本と呼ばれ、江戸時代の印刷技術である木版印刷で摺られました。

現代の書物と異なり、版本は袋とじで製本されています。図1を見ると、紙の折り返しがページをめくる側になっており、その反対を図2のように糸でとじて製本しています。



図1 めくる側のアップ写真  
※説明のため袋とじの中を  
広げて撮影しています。

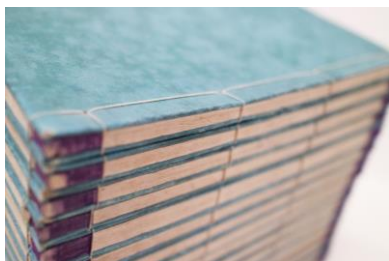


図2 糸で縫ってとじて製本しています。

次のページの絵柄

前のページの絵柄



ページを糸で  
とじていた側

ページを糸で  
とじていた側

図3 とじ糸をほどいて紙面を開いたところ  
橘守国「絵本写宝袋」

紙面を折りページをめくる部分が  
赤点線のラインです

では、なぜ袋とじになっているのでしょうか？  
ここで、版本を分解した図を見てみましょう  
図3は、藤澤浮世絵館で補修のためとじ糸を  
ほどいて分解した資料、橘守国「絵本写宝袋」  
の一枚です。袋とじのため、左右は異なるペー  
ジの絵柄です。



図4 表側の絵柄のほとんどが透けて見えています

図4は、図3の紙面を裏返したものです。表の絵柄が裏側にほとんど透けて見えています。江戸時代の印刷方法である木版画は、紙の繊維の中に墨や絵の具をバレンで入れ込むので、紙の裏側に印刷面が透けてしまいます。そのため、紙の両面に印刷することができず、裏側が見えないように袋とじにしたのです。



図7 さらに摺ると絵柄がどんどん透けてきます



図6 バレンで摺った部分に絵が透けて見えてきます



図5 墨を塗った版木に和紙を置きます

ここで、江戸時代の木版画の特色である摺り込む過程を見てみましょう。図5から図9までは、江戸時代と同じように、版木に墨を塗り、和紙を置いてバレンで摺っていく工程です。

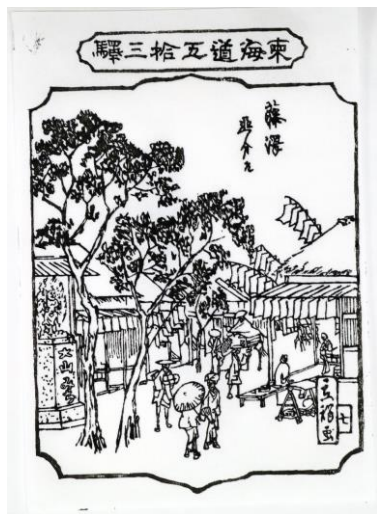


図10 完成した版画の表面です。図8と絵柄が逆位置であることがわかります。



図9 紙をめくれば摺り上がりです。うまく摺れたら触っても手に墨や絵の具はつきません。

摺り込みを終えた図8をめくって表面が見えてくるところが図9です。図10が完成した版画の表面となります。



図8 バレンでの摺りこみを終えたところ。完全に絵柄が紙の裏側に透けて見えています。

袋とじとしたことでもおもしろい現象が生まれました。それは一枚の図を見開きページに印刷する場合に、左右を別の紙に印刷したことです。

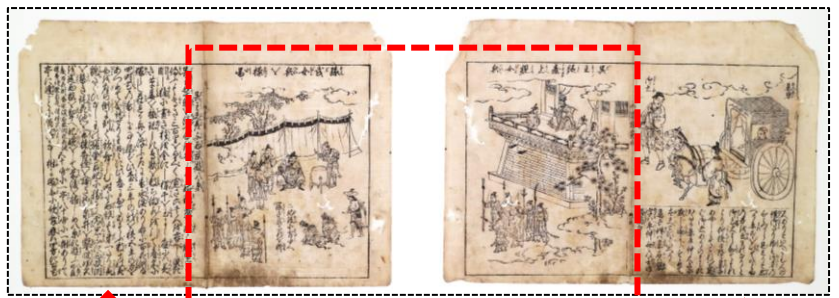
図11は、「繪本写宝袋」6巻の見開きページです。右側の紙面が図3と図4で紹介したページです。この見開きページは中国の春秋戦国時代の兵法家である孫武が呉の国の王様の前で孫氏兵法の奥義を見せる一場面「孫子勒姫兵」です。左右の絵柄が別々の紙に印刷されています。

図11の見開きを分けて袋とじを開いたのが図12です。図11の絵柄と合わせて、右の紙には前のページの絵柄、左の紙には次のページの文字が摺られています。



図11 版本をとじている糸をほどいて紙面を分けています。

木版画の特性である摺り込みにより、江戸時代の版本は袋とじという製本方法になりました。おそらく絵師は、見開きページで一つの場面を分けて描くことはないの、描かれた元絵を編集者が左右に分割して版下絵を作り、それを彫師が彫刻していたと思われる。今回は、江戸時代に庶民が楽しんだ版本について、その製本の構造を紹介しました。実物をご覧いただき江戸時代の出版文化を楽しんでいただければ幸いです。



次のページの文字

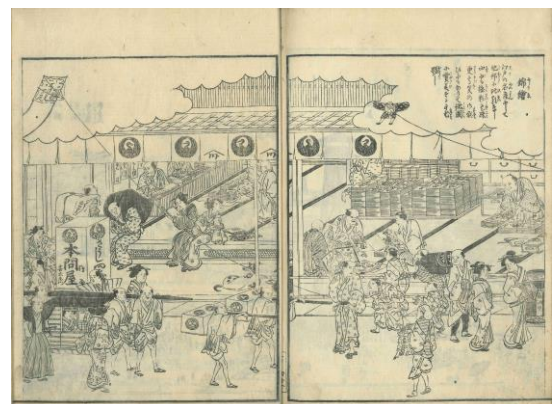
図11の見開きページの絵柄の範囲

前のページの絵柄

図12 見開きを分けて袋とじを開いたものです。

大阪で出版された江戸市中の呉服や武具、薬など様々な買物や飲食店の商店約2600店を紹介するガイドブックです。店舗の広告も兼ねていたため広告料をとったとも言われます。挿絵を葛飾北斎、序文を大田南畝(おおたなんぼ)の当時の人気絵師と随筆家に依頼したかなりの熱量で編纂されており、ベストセラーとして全国に流布されていたようです。

本書は、寛政9年(1797)に初代の葛屋重三郎が亡くなった後の刊行物であり、二代目が引き継いだ耕書堂(葛屋)は、所在地が通油町から小伝馬町に移転していることがわかります。店名の脇には葛屋が主に取り扱う商品を紹介する意味で「新吉原細見版本」と記載されており、初代が勝ち取った出版権利を二代目がしっかりと引き継いでいたことがうかがえます。



「東都名所図会(江戸名所図会)」 天保5-7年(1834-36)発行 齋藤月岑作 長谷川雪旦画



書物問屋の初回ページ 葛屋の紹介欄

「江戸買物独案内」 文政7年(1824)頃 刊行 中川五郎左衛門(中川芳山堂)編 葛飾北斎画

齋藤月岑による「江戸名所図会」の1ページです。この図は、江戸の版元の中でも有名であった鶴屋喜衛門の書店「仙鶴堂」の店先です。江戸の名物で比類ないものとして錦絵(浮世絵)を販売している場所と紹介されています。